

中高生とともに差別と闘う

『レナの本音』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



前号で紹介した、ミナコが書いてきた「人権作文『本音で話す』」の続きです。

*

今日話し合ったことも言ってみました。

「それは、親子の縁を切っても一緒になるうって言わなきゃいけないんじゃないの」

「でも、やっぱり親にも分かってもらわないといけないと思う」

私はどう言えば自分の思っていることが上手く伝えられるのだろうと思ひ、話しながら涙が出てきました。

「まあ、ばあさんはあんまり深く考えないようにしてる」

私は祖母の最後の言葉にこう返すのが精一杯でした。

「おばあちゃんも他人事だと考えずに、実際、弟たちは部落に今住んでるじゃない。私だって半分部落の血が流れてるし。そうだったら、おばあちゃんだって他人事ではないじゃない」

祖母に私の思いが完全に伝わったとは思えません。今のままでは。これからもっと祖母と話していかなければならぬと思ひました。父にだつて、私の思いを伝えたいと思ひました。今日の話し合いで、もっともつとがんばろうと思ひました。

差別をなくしていくには、仲間が必要だと思ひます。どんなに差別をなくそうとしても一人ではどうすることもできません。落ち込んでいる時、悩んでいる時、隣に仲間がいて

くれて、励ましてくれるだけで、どんなに楽になるか。私たちは、今、そんな仲間づくりをしているのだと思ひます。

仲間のなかには、まだ一人で悩んでいる人がいるかもしれません。もし、仲間が一人で悩んでいるとしたら、私は話を聞きたいです。私がみんなにしてもらったように、私が受けとめて楽にできればと思ひます。

差別に立ち向かうことは大切です。しかし、一人で立ち向かうとすれば、寂しい思いをしたり、恐くて自分の本音を語れなくなったりします。だからこそ、差別に一人で立ち向かうとせず、仲間と一緒にがんばればいい。私には、本音で語れる仲間がいます。この仲間の輪を広げて、仲間とともに、差別に立ち向かっていきたいです。

*

この年は、延長されていた法がちょうど切れるタイミングでした。しかし、法が切れたからといって、部落問題がすぐに解決されるわけではありませぬ。それは、マリアやミナコの言葉が、言葉以上に雄弁に物語っています。たかだか一世代で解決できる問題ではありません。本当に解決させるなら、最低でも三世代の時間が必要です。にもかかわらず、法切れて、「これからは教育と啓発」として放り出される。それに対してちゃんとしたケアがされていければいいのでしようが、現実はそのようじゃない。そのことを如実に物語る子どもたち

の胸の内でした。

夏、そして秋

この年の夏、子どもたちは、秋の文化祭で演じる人権劇の練習に明け暮れることになりました。

人権劇は、三年生を二つのユニットに分けて取り組まれていきました。

一つは、部落差別による冤罪の狭山事件をモチーフにした、「サヤマの風」。これには、学校の文化祭で人権劇として上演されることを知った、

事件当事者の石川一雄さんとパートナーの早智子さんが登壇するというサプライズがありました。来校することを知った子どもたちが、最後の舞台あいさつでステージに呼び寄せたのです。会場全体が大大ビックリで、大盛り上がりとなりました。

そしてもう一つは、部落差別による結婚差別をテーマにした、「SEASONS」でした。

地区出身のケイコと地区外出身のイチカワが出会い、互いに惹かれ合います。しかし家族の反対に会い、二人は別れてしまふ。それでも再び出会い、互いの思いを確かめ合います。そんなとき、ケイコの妹も結婚差別にあいます。ところが妹のお腹には、すでに小さな命が宿っています。そのことを知った相手の父親はケイコの家を訪れ、その小さな命をあきらめるように説得をはじめます。そんな親の態度を見かねた妹の彼は、家を飛び出してきました。最終的にケイコとイチカワは互いの両親

を説得し、結婚に至ります。

この劇は、毎年続編が上演されてきました。この年の子どもたちは、一年生の時に先輩が演じる「SEASONS」を観、二年生の時にその続編を上演し、三年生になって結婚までたどり着くという流れでした。

劇と言っても、一つの大きな人権学習の資料とも言える劇のストーリーです。その劇の役を、カレンもミナコも演じました。

レナの本音

文化祭、人権劇を終えた後、「結婚差別に立ち向かう」と題して学年合同人権学習を実施しました。

春の段階ではマリアに言葉は返せても、自分のことは語りきれなかったレナ。そのレナが、授業の冒頭、口火を切つて語り始めます。

「えっと、「SEASONS」の登場人物の関係が、うちの親と一緒にいふか、かぶつてて…。どう言えばいいんだろ…。」

私のお父さんが地区出身で、地区外のお母さんの家族というか、親戚が反対してただけで、もうすでにお母さんのお腹の中に私がいて、仕方なく結婚したっていうか…。

お母さんの方のおばあちゃんとは仕方なく、仕方なく許してくれたみたいなんだけど、親戚とかにはつき合ひ…親戚つき合ひみたいなのはしないうって言われたらしくて…。なんて言ったらいいの…。」

(次号に続く)